

素手でなら殺されてもいい

と思える日

生温かいあなたのサドル

宇井 麻千 大阪府

殺されたくはない、そんなことされたくないけれど。あなたになら、あなたの温度を感じられるのなら、いい。二句目の「殺されてもいい」という字余りや決断を放棄してしまった姿に、作中主体の「あなた」に対する屈折した感情が伺える。「サドル」は日光や時間帯など、外的な要因で表面温度が大きく変わる。この「日」、主体はあなたの気まぐれな優しさをうけたのだろうか、すぐに変わることを経験から知っていた。再び悲しい思いをする前に、あなたの優しい温度を覚えたまま殺されたかった。

雨玉が転がってくるのが見える

ビニール傘のがやっぱ好きだな

好きだな、僕は

佐々木みつる 東京都

雨粒は、音からイメージされる速度より実際はずっとゆっくり降ってきて、傘の上で転がる。雨天の空の少ない光を雨粒のひとつひとつが吸い込んで、きらきらと光る。色付きの傘では見えないものである。自分の「好き」は自分で決めたい。当たり前のはずのことだが、年齢や性別など本当は全く関係のないものを引き合いに出し、他者は価値観をしばってくる。「やっぱ」ということは揺らぐ瞬間があったのだろう。三行目、再確認が作者の意識の輪郭を強める。独り言ちることで回復する気持ちがある。

海で犬に会ったら

わたしの魂です、

焚き火にあてて

消してください。

翠 東京都

「魂」が「犬」なもの、それが「焚火」によって消えるのも現実ではないのに、妙な手触りがある。「消してください」と丁寧語で語りかけているが居合わせた人は従わざるを得ない迫力がある。最後の決断を放棄するさより、消してほしい、という強烈な欲が強く燃

えている。欲が強いほど、死の輝きは増してしまうのだ。作中の「わたし」は心も肉体も疲れ切っていて、おそらくもう動くことができない。放された犬になった魂は帰り道も分からなくなるほど走り続け、消してもらうのを待っている。「わたし」の最後のかげら。何もかも繋がらない言葉の奥に、作者のみが確信しているものを感じる。

カミソリに輪郭を確かめられる

真昼の月のような床屋で

松下 誠一 東京都

自分の輪郭を意識する場面は、実はあまりない。鏡で顔を見るとときや自分の手で顔を触る時も、「輪郭」がどうなっているかまじまじと見るより、全体の顔のパーツや顔色、ニキビの場所なんかを気にしてしまう。自分に輪郭があると感じるのはいはり他人に触れられるときだけれど、主体は「カミソリ」に確認させられる。顔の毛と角質が銀色の刃によって取り除かれ、ひと剃りごとに存在がくっきりしていく。髭が生える前の少年期、ぼんやりとしていた自意識からの脱皮を思わせる。「真昼の月」は白く柔らかい。脱ぎ捨てた自分が床屋に散らばってゆく。

ながらながら

ながれながれて

はらはらはらはら

ヒラノユリア 神奈川県

(求められるものに縛られ)ながら(生き)、(自分の気持ちは日々の忙しなさに)ながれて(心も涙も)はらはらはらはら。といったところだろうか。私には、具体はなくても滲み出るやりきれなさが感じられた。上記のことが全く当てはまるとは思っていないが、このように核心に近いものほど言葉にならず手から滑り落ちてしまう。そして言いたいことを飲み込んでいくのが人の人生でもある。「はらはらはらはら」のみ四度の繰り返しがあり、自分の中の“何か”が削れ、元に戻れないほど崩れ去ってしまったようだ。拾い集めてあげたい、と思う。

神も仏もあるものか

薬だけ

モラン 神奈川県

かつて人々は日食や疫病なんかを“神の怒り”と考えていた。なぜそんなに必死に祈れたのかといえ、色々な事を知らなかったからだろうと思う。知識を得るほど、人々は信じる

心とその先で繋がっていた力との縁が細くなってゆく。分からないことがあるとき、少し調べればほとんどが解明されるこの世。だけど、解決することは減っていく気がするのにはなぜだろう。信じるものなど「あるものか」と吐き捨てたあとの「葉だけ」というひと言に、白い葉と作中主体のみで構成された清潔すぎる苦しい世界を思う。かつての人々のように信じる心は現代の我々にはないかもしれないが、葉を握りしめた手の中にも、捨てきれない信仰の気配をかすかに感じる。

喉仏先に除かれ鳥曇

李いう子 佐賀県

遺体を茶毘に付したあと最後に拾い上げるのが「咽仏」だが、ここでは「先に」除かれていく。本来の手順とは逆に進めなければならぬ人を亡くしたのだろうか、どんな生き様だったのだろうか、と怖くなる。この作品は何をしているところなのかと考えるが、死ではない場所へ進むところにも見える。もうひとつ「喉仏」として思い浮かぶのは男性の喉である。男女平等と言うが、現代の社会でも労働環境など女性が男性に並び成立するシーンはまだ多い（もちろんそうでない時も多々あるが）。私たちは産まれる前に本当はあるはずだった「喉仏」を何者かに除かれ、“女”として産まれて落ちるのではないか。女には曇空のこの世、なのかもしれない。

桜餅指香る今賭博場へ

田崎森太 東京都

桜餅の香りは良い。こくがあるようで爽やか、記憶をこするような不思議な香りがする。実際の桜と同じではないはずなのに、桜を愛する日本人のDNAに組み込まれた何かを刺激してくる。「桜餅」指でつまみ、ぱくっと食べた作者。その後ふと指から先ほどの桜餅のかぐわしい香りがしてくる。この特別な指ならいいあたりが出るかも！と思いきや立ちいそいそと「賭博場」へ向かう。「指香る今」が巧い。この作品の力点、作者の個性が光る。「パプリカの／内に寝釈迦のゆったりと」「花菜咲き職に疲れた眼を洗う」「土筆生える／遠き世からのうすみどり」など、技術と感受性の瑞々しさを感ぜられる作品が多かった。

川面に桜の膜をはる

遊覧船が引き裂いていく

川面に桜の膜をはる

レモンマートル 北海道

命の油分を感じた。命は油のように何かにこびりつくもので、植物も例外ではなかった。川面に油膜のように浮かび、水の動きに合わせて揺れる。桜の花弁は集まるとほの明るく光って見えるが、それを裂く遊覧船の後ろに続く川の冷たい暗がりには、美しいものの裏に潜む恐ろしさが見える。「…をはる」の自動詞に作者ではない何者かの力で「桜の膜」がはられていくようだ。地球の面積を少しでも春で埋めようとする、何者かの力。技術的にも、言葉で時間経過を表現しており巧い作品。

菜の花の長方形に灯る畑

五味 はこ 神奈川県

発光している、と感じるのはなぜか春の花だけである。“いちめんの菜の花”はよく目にする言い回しだが、菜の花畑のかたちまで見ることで「長方形」の枠の中で咲いているという発見をした作者。「長方形に」という表現によって黄色を想像する範囲が限定され、「灯る」で読み手の心に一齐に明かりをつける。視点が絵画的で、美術作品としても作ることができそうである。また、「一両が麦の青さを分けて行く」も良い作品だった。この電車は始発かなど感じられるが、まだ青い麦の気配だけが満ちる線路上の空間を「一両目」がかき分けて通る。みっしりと詰まった瑞々しい空気。